

名詞による名詞修飾について

——日本語と朝鮮語の対照研究——

塚 本 秀 樹

1. はじめに

本稿の目的は、日本語と朝鮮語を対照しながら、名詞による名詞修飾について有格か無格かの観点から考察して、有格及び無格の成立条件などを明らかにし、そうして導き出された日本語と朝鮮語の間の相違点が、理論的枠組みを構築する際にどういった意味合いを持っているのか、ということについても言及することである。

2. 有格・無格についての考察

名詞修飾の構造になる前の元の文における特に格助詞に着目し、格助詞それぞれの場合について見ていくことにする。

2. 1. 主格、対格の場合

- (1) a. 李先生が講演する。
b. *李先生がの講演
c. 李先生 \emptyset の講演
d. I-sensayngnim-i kangyen-hata.¹⁾
e. *I-sensayngnim-i-uy kangyen
f. I-sensayngnim- \emptyset -uy kangyen
- (2) a. 母が悩む。
b. *母がの悩み

- c. 母 \emptyset の悩み
 d. emeni-ka komin-hata.
 e. *emeni-ka-uy komin
 f. emeni- \emptyset -uy komin
- (3) a. この洗濯機を使用する。
 b. *この洗濯機をの使用
 c. この洗濯機 \emptyset の使用
 d. i seythakki-lul sayong-hata.
 e. *i seythakki-lul-uy sayong
 f. i seythakki- \emptyset -uy sayong
- (4) a. 言語学を研究する。
 b. *言語学をの研究
 c. 言語学 \emptyset の研究
 d. enehak-ul yenkwu-hata.
 e. *enehak-ul-uy yenkwu
 f. enehak- \emptyset -uy yenkwu

上例それぞれの(a)~(c)は日本語であり、その日本語に相当する朝鮮語が(d)~(f)である。そして、(1)(2)は、名詞修飾の構造になる前に、主格補語が現れていた場合であり、(3)(4)は、対格補語が現れていた場合である。また、それぞれの(b)は、「名詞+格助詞」という構成をとる補語の格助詞が残ったまま、そのうしろに属格の格助詞「の」が付加されて別の名詞を修飾している構造になっている。つまり、「名詞+格助詞+の+名詞」という構造であり、これは、渡辺(1971)が称する「有形無実化」の現象に相当する。それぞれの(c)は、(b)とは少し異なり、補語の格助詞が脱落したあとに属格の格助詞「の」が挿入されて別の名詞を修飾しており、「名詞+の+名詞」という構造になっているわけである。本稿では、(b)のような名詞による名詞修飾を「有格の名詞修飾」、(c)のような名詞による名詞修飾を「無格の名詞修飾」と呼ぶことにする²⁾

また、朝鮮語の(e)(f)はそれぞれ、日本語の(b)(c)に対応する。従って、朝鮮語

においては、(e)が「名詞+格助詞+uy(属格の格助詞)+名詞」という構造になっている。「有格の名詞修飾」であり、(f)が「名詞+uy+名詞」という構造になっている。「無格の名詞修飾」である。

以上の例から見出されることは、日本語と朝鮮語は共通して、主格及び対格の場合には無格の名詞修飾を成立させることができるが、有格の名詞修飾は不可能だ、ということである。日本語、朝鮮語ともに主格と対格の場合に無格の名詞修飾が可能なのは、それらの格助詞が具象的な意味を有するのではなく、主に統語的な機能を担っているものであり、除去されても意味解釈に差し障りがあるわけではないからであると考えられる。

(5)のような場合も観察される。

- (5) a. ドイツ軍がその都市を破壊する。
 b. *ドイツ軍がのその都市をの破壊
 c. ドイツ軍∅のその都市∅の破壊
 d. ドイツ軍によるその都市∅の破壊
 e. Tokilkwun-i ku tosi-lul phakoy-hata.
 f. *Tokilkwun-i-uy ku tosi-lul-uy phakoy
 g. Tokilkwun-∅-uy ku tosi-∅-uy phakoy
 h. Tokilkwun-ey uyhan ku tosi-∅-uy phakoy

これは、(5 a, e)が示すように、一文中に「ドイツ軍が」「Tokilkwun-i(ドイツ軍が)」という主格補語と、「その都市を」「ku tosi-lul(その都市を)」という対格補語の両方が現れている場合である。このような場合においても、(1)~(4)のような、一文中に主格補語か或いは対格補語のどちらかしか出て来ない場合と同様に、日本語と朝鮮語は両方とも、(5 b, f)が示すとおり、有格の名詞修飾は許されず、(5 c, g)が示すとおり、無格の名詞修飾であれば、容認可能である。

また、「ドイツ軍が」「Tokilkwun-i(ドイツ軍が)」という主格補語の、「破壊する」「phakoy-hata(破壊する)」という動詞にとっての意味役割は「動作主」であるので、その動作主を表す複合格助詞「~によって」「~ey uyhayse(~に

よって)”の連体形である「～による…」“～ey uyhan… (～による…)”を用いて、(5 d, h)のように表現することもできる³⁾

もちろん、一文中に主格補語しか存在しない場合でも、その主格補語の意味役割が動作主であれば、「～による…」“～ey uyhan… (～による…)”を用いての表現が可能である。それは、次のように(1)の例で確かめることができる。

- (6) a. 李先生が講演する。
 b. 李先生による講演
 c. I-sensayngnim-i kangyen-hata.
 d. I-sensayngnim-ey uyhan kangyen

しかし、(2)の場合には、主格補語でありながら、次に示すように「～による…」“～ey uyhan… (～による…)”の使用は認められない。

- (7) a. 母が悩む。
 b. *母による悩み
 c. emeni-ka komin-hata.
 d. *emeni-ey uyhan komin

このように成立不可能なのは、主格補語の中に現れた名詞「母」“emeni (母)”の意味役割が「悩む」“komin-hata (悩む)”という動詞にとっては「動作主」ではなく、「経験者」であり、意味役割が異なるからである、というように説明できる。

2. 2. 与格、目標格、方向格の場合

次に、与格、目標格、及び方向格の場合をまとめて取り上げる。これに関しては、日本語と朝鮮語の対照研究として非常に興味深いことが見出される。まず、次のような例を見てみよう。

- (8) a. 先生 { に } 質問する。
 b. { *へ }
 c. 先生 { *に } の質問
 d. { へ }
 e. *先生 \emptyset の質問

- f. sensayngnim { -eykey } cilmun-hata.
 g. { * -ulo }
- h. sensayngnim { -eykey } -uy cilmun
 i. { * -ulo }
- j. *sensayngnim-∅ -uy cilmun

日本語の「質問する」と朝鮮語の“cilmun-hata (質問する)”といった動詞は、「動作主」((a)(f)ともに、動作主の補語は、現れていない)と「相手」を表す補語を要求し、「対面」の表現とでもいうようなものを成立させる。⁴⁾このような表現においては、両言語ともに一般的には(b)(g)のように与格を方向格に置き換えることはできない。

先に日本語の方を見ることにするが、(a)のような文が有格の名詞修飾に転じたものが、(c)である。(c)に示されるように、与格の場合は、有格の名詞修飾が不可能であることがわかる。しかしながら、(b)のように名詞修飾になる前の文においては認められなかった方向格が、(d)のように有格の名詞修飾になった時には許される。このように、日本語の与格の場合には、そのまま有格の名詞修飾に転ずることはできないが、元の文では与格との交替が許されなかった方向格が与格に代わって現れ、有格の名詞修飾を成立させる、とすることができる。また、無格の名詞修飾は、(e)に示されるように、不可能である。

次に、朝鮮語の方を見ることにする。(f)のような与格補語を含む文を有格の名詞修飾にしたものが、(h)である。そこに示されるように、朝鮮語は日本語とは違い、与格の場合、有格の名詞修飾を許す。そして、(i)に示されるように、与格に代わって方向格が用いられることにより、有格の名詞修飾を成立させることはできない。この点も日本語の場合とは異なる。また、(j)に示されたような無格の名詞修飾は、日本語の場合と同様に認められない。

以上言及したことをより明確にする例を二つばかり挙げておく。

- (9) a. 世界新記録 { に } 挑戦する。
 b. { ?へ }

- h. pyenhosa $\left\{ \begin{array}{l} \text{-eykey} \\ * \text{-lo} \\ \text{-wa} \end{array} \right\}$ sangtam-hata.
 i.
 j.
 k. pyenhosa $\left\{ \begin{array}{l} \text{-eykey} \\ * \text{-lo} \\ \text{-wa} \end{array} \right\}$ -uy sangtam
 l.
 m.
 n. *pyenhosa- \emptyset -uy sangtam

(a)(c), (h)(j)に示されるように、「相談する」“sangtam-hata (相談する)”は、日本語、朝鮮語ともに、与格と共格の交替を許す動詞である。また、与格をとった場合は「対面」の表現であるので、(b)(i)のように、両言語ともその与格が方向格に替わることはできない。日本語においては、(d)のように、与格のまま有格の名詞修飾に転ずることはできないが、(e)のように、元の文の(b)では認められなかった方向格が与格に代わって現れると、有格の名詞修飾が許されるようになる。また、朝鮮語においては、(k)のように、与格がそのまま有格の名詞修飾に転ずることができるのに対して、元の文の(i)で認められなかった方向格は、与格と代わった(l)のような有格の名詞修飾でも許されない。このような日本語と朝鮮語の相違は、先ほど見た(8)(9)(10)の例のような、与格が共格と交替できない場合と同じである。そして、両言語において、元の文の(c)(j)のように、与格との交替が許される共格も、(f)(m)のように、有格の名詞修飾を形成することができる。与格、方向格、共格のいずれを想定してもかまわないが、それが脱落した名詞修飾、つまり無格の名詞修飾は両言語とも(g)(n)のように認められない。ただ、元の文において与格と共格の交替を許す補語を含む場合には、共格が有格の名詞修飾に現れることによって、日本語の方向格や朝鮮語の与格が有格の名詞修飾に転ずることを補うような働きをするため、後者のような有格の名詞修飾が受け入れられにくくなることがあるようである。

以上のような観察では、朝鮮語における方向格の場合、有格の名詞修飾に転ずることは常にできない、と思われがちであるが、実はそうではなく、認められることがある。次の例を見てみよう。

- (12) a. 釜山 { に } 出張する。
 b. { へ }
 c. 釜山 { *に } の出張
 d. { へ }
 e. *釜山 \emptyset の出張
 f. pusan { -ey } chwulqchang-hata.
 g. { -ulo }
 h. pusan { -ey } -uy chwulqchang
 i. { -ulo }
 j. *pusan- \emptyset -uy chwulqchang

日本語の(a)と、それに対応する朝鮮語の(f)は、ともに、「出張する」「chwulqchang-hata (出張する)」という動詞が「動作主」((a)も(f)も「動作主」の補語は具現化していない)に加えて「到達点」或いは「方向」を表す補語を要求し、「入りどころ」を表す表現になっている⁹⁾。従って、それはこれまで見てきた(8)~(11)のような例とは異なり、移動を顕著に表す表現であるので、(b)(g)のように、両言語とも目標格が方向格に替わることを一般的には許す。日本語においては、(c)のように目標格の場合、有格の名詞修飾に転ずることはできないが、(d)のように方向格の場合は可能である。よって、日本語の、このような移動の表現における有格の名詞修飾の成立の状況は、先ほど見た対面の表現の場合と類似していることがわかる。次に朝鮮語においては、(h)のように目標格の場合も、(i)のように方向格の場合も、有格の名詞修飾は成立する。先ほど見た対面の表現においては、与格はそのまま有格の名詞修飾に転ずることができるが、元の文でも許されない方向格は有格の名詞修飾に転ずることも許されないのに対し、このような顕著に移動を表す表現においては、目標格のみならず方向格も有格の名詞修飾を形成することが認められるわけである。また、無格の名詞修飾は、(e)(j)に示されるように、両言語とも認められない。これについては、先ほどの対面の表現の場合と食い違う点はない。

なお、ここで取り上げた朝鮮語に関することは、あまり知られていない事実

であり、この言語事実の指摘だけでもかなり意義のあることであると思われる。

2. 3. 共格, 具格, 原因格, 位格, 奪格の場合

最後に、残った格助詞の場合における名詞修飾の様相を観察する。先にそれぞれの場合の例を列挙する。

- (13) a. 英子と結婚する。
 b. 英子との結婚
 c. *英子 \emptyset の結婚
 d. Yengca-wa kyelhon-hata.
 e. Yengca-wa-uy kyelhon
 f. *Yengca- \emptyset -uy kyelhon
- (14) a. 自転車で通学する。
 b. 自転車での通学
 c. ?自転車 \emptyset の通学
 d. cacenke-lo thonghak-hata.
 e. cacenke-lo-uy thonghak
 f. ?cacenke- \emptyset -uy thonghak
- (15) a. 不況で失業する。
 b. 不況での失業
 c. *不況 \emptyset の失業
 d. pulhwang-ulo silep-hata.
 e. pulhwang-ulo-uy silep
 f. *pulhwang- \emptyset -uy silep
- (16) a. 屋外で運動する。
 b. 屋外での運動
 c. (?)屋外 \emptyset の運動
 d. okoy-eyse wuntong-hata.
 e. okoy-eyse-uy wuntong
 f. (?)okoy- \emptyset -uy wuntong

- (17) a. 会社から帰宅する。
 b. 会社からの帰宅
 c. *会社∅の帰宅
 d. hoysa-eyse kwika-hata.
 e. hoysa-eyse-uy kwika
 f. *hoysa-∅-uy kwika

(13)は共格, (14)は具格, (15)は原因格, (16)は位格, (17)は奪格の場合の名詞修飾のあり方をそれぞれ示している。以上の例を観察することによってわかる点は、日本語、朝鮮語ともにそれらの格助詞の場合には、(b)(e)のように有格の名詞修飾に転ずることは可能であるが、(c)(f)のように無格の名詞修飾は成立しにくい、ということである。上記のような格助詞にあつて無格の名詞修飾に転ずることが難しいのは、それらが統語的な役割を主に果たすのではなく、具象的な意味を含有する格助詞であるということ、脱落すると意味解釈に支障を来すからであると考えられる。ただ、中には無格の名詞修飾になつても意味がわかれば受け入れられる場合があるかもしれないが⁹⁾、一般的には有格の名詞修飾に比べると、少し困難であると思われる。

2. 4. まとめ

以上、本節で考察してきたことをまとめてみると、次のようになる。

(18) (A)無格の名詞修飾の成立条件

(日) ①主格, ②対格の場合

(朝) ①主格, ②対格の場合

(B)有格の名詞修飾の成立条件

(日) ①与格或いは目標格に代わって用いられた方向格, ②共格,

③具格, ④原因格, ⑤位格, ⑥奪格の場合

(朝) ①与格, ②目標格, ③目標格に代わって用いられた方向格,

④共格, ⑤具格, ⑥原因格, ⑦位格, ⑧奪格の場合

また、種々の統語現象を吟味することによって、格助詞間に次のような優位階層性があることが論証されている?

(19) 主格 > 対格 > 与格 > 斜格

今、日本語と朝鮮語における、無格の名詞修飾、及び有格の名詞修飾の成立状況を、(19)の格助詞間の優位階層性に当てはめて記すと、次のようになる。○は成立が可能であることを、×は成立が不可能であることをそれぞれ表す。

(20)

		主格 >	対格 >	与格 >	斜格
無格の名詞修飾	日	○	○	×	×
	朝	○	○	×	×
有格の名詞修飾	日	×	×	×	○
	朝	×	×	○	○

このように、無格の名詞修飾、及び有格の名詞修飾の成立条件を記述するには、日本語、朝鮮語ともに格助詞が対象となり、両言語間では若干の相違が見出されるものの、他の統語現象によっても論証されている格助詞の優位階層性を遵守しており、またそれに従って説明が与えられる。

3. 理論的含意

最後に、前節で考察した、無格及び有格の名詞修飾に関する日本語と朝鮮語間での違いが、理論的枠組みを構築する際にどのように反映するかを簡単に述べ、本稿を終えることにしたい。

前節で考察したように、日本語と朝鮮語の間の相違点は、日本語においては与格及び目標格の場合、それが方向格に置き換えられなければ、有格の名詞修飾に転ずることができないのに対して、朝鮮語においては与格の場合も目標格の場合もそのまま有格の名詞修飾への転換が可能である、ということであった。

日本語において、「*～にの…」といったように、与格及び目標格の場合に有格の名詞修飾が成り立たないのが、音韻、形態、統語のどのレベルにおける制約であるのかは明らかではないが⁸⁾、そのような有格の名詞修飾は許されないの

に、方向格が代用されると、有格の名詞修飾が認められるようになる、ということが、理論的枠組みのどこかで記述されていなければならない。それに対して、朝鮮語では、与格と目標格のいずれの場合も有格の名詞修飾が成立可能なわけであるので、そういった記述は要らない。このように、名詞による名詞修飾について言えば、朝鮮語よりも日本語の方が、理論的枠組みのメカニズムが少しばかり複雑になるのである。

注

- 1) 印刷などの便宜のために、朝鮮文字(ハングル)は、ローマ字に転写した。ローマ字転写には、the Yale Romanization Systemを採用した。
- 2) 「有格」「無格」という用語は、寺村(1980)によった。
- 3) 複合格助詞の詳細については、塚本(1987, 1990)を参照のこと。
- 4) この表現の詳細については、寺村(1982)と塚本(1984)を参照のこと。
- 5) 注4)と同様。
- 6) 例えば、寺村(1980:232)は、日本語の「で」の場合は有格の名詞修飾と無格の名詞修飾の両方がある、というように記述している。
- 7) 三上(1953, 1970), 渡辺(1971), 塚本(1984)を参照のこと。塚本(1984)では、日本語と朝鮮語を対照しながら、九種類の統語現象を取り上げて議論を行っている。
- 8) 杉岡(1989:184)にも、同様の指摘がある。

参 考 文 献

- 黄燦鎬・李季順・李吉鹿・張奭鎮(1977)『教材編纂 ul wihan 韓日語対照分析』韓国 Seoul: Seoul 大學校語學研究所。
- 李吉鹿(1976)「韓日兩語 uy 文法體系 ey tayhan 比較研究——格助詞 uy 機能 kwa 分布」『應用言語學』第8巻第2號, pp.135-167, 韓国 Seoul: Seoul 大學校語學研究所。
- 三上章(1953)『現代語法序説』刀江書院。〔1972年にくろしお出版から復刊〕
- 三上章(1970)『文法小論集』くろしお出版。

名詞による名詞修飾について

- 杉岡洋子（1989）「派生語における動詞素性の受け継ぎ」久野暉・柴谷方良編『日本語学の展開』pp. 167-185, くろしお出版。
- 寺村秀夫（1980）「名詞修飾部の比較」『日英語比較講座 第2巻 文法』pp. 221-266, 大修館書店。
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味』第I巻, くろしお出版。
- 塚本秀樹（1984）「文法関係と格助詞——日本語と朝鮮語の対照研究——」大阪外国語大学大学院日本語学専攻修士論文。
- 塚本秀樹（1987）「日本語における複合格助詞について」日本語教育学会昭和62年度第7回研究例会口頭発表。
- 塚本秀樹（1990）「日本語と朝鮮語における複合格助詞について」『アジアの諸言語と一般言語学 西田龍雄教授還暦記念論文集』pp. 646-657, 三省堂。
- 渡辺夷（1971）『国語構文論』塙書房。

付 記

金東勲, 金静子, 柳慶熙, 権俊, 辛妍鎮の方々には, 朝鮮語のインフォーマント調査で大変お世話になった。記して厚く感謝の意を表する次第である。